

個人空間の起源

—— 英国17世紀のカントリーハウス詩再考 ——

岡 田 宏 子

Origins of Private Space

—— A Further Examination of Seventeenth Century

English Country House Poetry ——

Hiroko OKADA

「英国全体がカントリーハウスで飾られた立派な風景庭園である」と評した Hermann Muthesius は、家を愛することが英国民の本質的なしるしであると見抜いていた¹⁾。都市の遊牧的な流動的生活とコントラストをなす田舎の農民的な定着的生活の具現化であるカントリーハウスは、英国自体の本質的な表象といえよう。

そこで、本論²⁾では、17世紀に書かれた数編のカントリーハウス詩(17世紀にカントリーハウスについて書かれた一群の詩)に類出する大広間の機能に書き込まれた政治的メッセージを解説し、カントリーハウスの住空間が分節化していく過程に、王党派の貴族の人々の近代初期におけるメンタリティーの変容の一断面を追求してみたい。結論から言えば、これはカントリーハウスにおける中世風の大広間の衰退と近代の私的な小空間である個室の起源をあとづける作業である。この試論は、単にそのスケリトンフレームを描くに過ぎない粗雑なものであるが、同時に王党派詩人の好んだ詩のテーマの一つである田園への隠棲の本質を説き明かし、幾分なりとも王党派の詩についての積極的な評価を試みるものである。

本論で取り上げるカントリーハウス詩は、ジェームズ I 世朝(1603-25)の1612年頃から、その息子の断頭台で斬首されたチャールズ I 世朝(1625-1649)の内乱という時代の分水嶺が始まる1649年頃までの約30年間に王党派の詩人達によって書かれている。

カントリーハウスは、ある意味で英国特有の建築物であり、それを題材に書かれたカントリーハウス詩も、古典古代にその始祖があるとはいえ、英国特有の文学の一ジャンルである。しかし、カントリーハウス詩の存在は、20世紀半ばになって初めてヒッバード(Robert Hibbard)により指摘された³⁾。彼によれば、そのジャンルはジョンソン(Ben Jonson)の書いた「To Penshurst」「ペンズハースト邸に寄せて」(1612)から始まりマーヴェル(Andrew Marvell)の「Upon Appleton House」「アプルトン・ハウス邸について」(1654)で終わる7篇の詩を含み、18世紀にポープ(Alexander Pope)によりもう一度息を吹き返して終息した詩群であった。ヒッバードのジャンルの存在の発見自体は高く評価できるが、このジャンルに属する詩編の数については、もっと多いのではないかという疑問を筆者は長年もっていた。1994年になってファウラー(Alastair Fowler)が、77編もの17世紀に書

かれたカントリーハウス詩を集めたアンソロジー、*The Country House Poem: A Cabinet of Seventeenth Century Estate Poems and Related Items* (Edinburgh UP) を出版した。ファウラーは、基本的にはカントリーハウス詩（彼は広く estate poems と呼んでいる）というジャンルの起源を、ジョンソンがパトロンのシドニー卿を賛美するためには、もはや新しい観念や理想を盛ることのできなくなってしまったエリザベス朝の騎士道的ロマンスの伝統と決別して、農耕詩の枠組みの中で「ペンズハースト」を書くという賞賛詩のパラダイム変換をおこなった時であると考えている⁴⁾。更に彼は、カントリーハウス詩を、「良き人生」(good life) のメトネミーとしての田園にある屋敷の賛美によってその主人の美德を讃える詩群と考えるヒップバードより遥かに広義のカントリーハウス詩の定義を提出している。即ち、農耕詩の中にホスピタリティーや階級的な義務にまつわる儀式に関係する10程のトピックを主題とするより小さなジャンルの詩をも含めており、カントリーハウス詩の伝統はPopeで終わるところか18世紀には、もっと多くのカントリーハウス詩が書かれたとヒップバードの説に異を唱えているのである⁵⁾。実は、ファウラーより10年前に既にパーフィット (George Parfitt) は、このジャンルを大きな枠組の中で捉えるべきであると言っている。パーフィットは、カントリーハウス詩を「場所の詩」(Poetry of Place) の一部として位置づけて、カントリーハウスを当時の社会情勢や政治経済がせめぎ合う場として定義した⁶⁾。

その一年前の1984年にウエイン (Don E. Wayne) は、パーフィットの定義をパラフレイズした形で次のように言っている。つまり、カントリーハウス詩は新しい歴史的状況に適合するために伝統的及び封建的観念の再定義の一部として現われ、その中に中産階級のアイデンティティーを彷彿とさせるような貴族階級の自己イメージの変容があった。建築とそれを取りまく風景 (自然) の両者が賞賛されているカントリーハウス詩自体がイデオロギー的な領域を構成し、システムチックな体系の中で意識的に定式化されていない態度や価値を形成しているグラウンドプランなのである⁷⁾。

基本的には、ファウラーの画期的なアンソロジーのテキスト群のなかでも、本論では、まずヒップバードの論文でとりあげられられた6編のカントリーハウス詩のジャンルの骨格を形成する詩として市民権を得ている、1642年に始まった清教徒革命以前に王党派の詩人によって書かれた5編の詩、ベン・ジョンソン (Ben Jonson, 1572-1637) の2篇の詩「ペンズハースト」(1612) 及び「ロバート・ロース卿へ」("To Sir Robert Wroth", 1612)、ロバート・ヘリック (Robert Herrick, 1591-1674) の「ルイス・ペンバートン卿への賛歌」("A Panegyrick to Sir Louis Pemberton", 1617-40)、トーマス・ケアリ (Thomas Carew, 1594/5-1640) の「サクサムへ」("To Saxham", 1631-2) 及び「友人 G. N. ヘレストより」("To my friend G. N. from Wrest", 1639) にラブレイス (Richard Lovelace, 1618?-58) の「アミンタのグローヴ屋敷、彼のクロリス、アリゴとグラチアーナ」("Amyntor's Grove, his Choloris, Arigo, and Gratiana", 1641) を加えた6編を中心に、その他の王党派詩人の詩をもとりあげ、ウエイン、パーフィットそしてファウラーのカントリーハウス詩観を踏まえつつ、既に述べた方向でカントリーハウス詩に表象される貴族階級のメンタリティーの読解を試みたい。

さて、次にカントリーハウスとはどのような家であるか、簡明に定義する必要がある。ジルアード (Mark Girouard) はカントリーハウスを (地方) 田舎にある支配階級の住む

“power house”「権力の館」であると言っている。⁸⁾館は四季裁判所の開催地として司法権を持ち、同郷の国会議員と国を動かす策を練る政治的な場所である。農業経営により経済の中心地でもあり、絵画、文学、建築、庭園、スポーツ、礼儀作法まで含めた貴族の文化の全てを収めた容器であった。家の所有とは即ち土地の所有を基盤とし、土地の所有こそは、権力の基盤であった。⁹⁾

建築史的に見ると、バラ戦争終結による平和の到来と修道院解散により、英国の全土地の面積の四分の一が貴族やジェントリの手に渡って、1570年から1615年の間はもはや皆ではない、住宅としてのカントリーハウスの建築が大流行した。豪荘なカントリーハウスは、主にエリザベス女王やジェームズ I 世の宮廷の高官や富裕階級によって建築された。彼らの殆どは、土地を基盤とする農業経済によらない、成り上がり者 (nouveaux riches) であり、富と権力を誇示するために外観の立派で豪華な新しいカントリーハウスを設計図に基づいて建てた。その目的は、従者や宮廷人など300人ほどの大部隊でカントリーハウスを訪問する君主の夏の巡幸の宿となるためであった。家の規模は、所有者の目指す権力の大きさの指標であると同時に、君主から受ける寵愛の大きさを表す身ぶりでもあった。家の持ち主にとって君主を迎えるための多大な出費は、見返りにうる権益の保証であった。

ところが、一方では不在地主も存在した。エリザベス朝以来、貴族やジェントリの多くが主に宮廷に出仕するためにもうけたロンドンのタウンハウス住まいをするようになり、カントリーハウスの中には荒れるにまかせているものも少なくなかった。1590年代頃より家政手引き書やバラッドなどで、古来からのカントリーハウスにおけるホスピタリティーの美風の衰退を嘆き、その維持と復活の必要が呼びかけられた。例えば、ホール (Joseph Hall) の諷刺詩 (*Virgidemiarum*, 1599) の一部にはペンブロー克伯爵の屋敷の空き家同然の様子が痛烈に諷刺されている。ローマ風の列柱の立ち並ぶ巨大な家の門は閉ざされ、広い門を叩けば、叩いた音のこだまが返るのみで、大理石の敷石は茂る雑草に覆われ、煙突からは煙も立ち上らない。このような家で、大広間において客への不作法なもてなしをして憚らない主人と召使の様子が痛烈に揶揄されている。

中世以来の伝統である大広間でのもてなしの欠如は、屋敷とその村落共同体との間の理想の相互関係の破綻、つまり農村の荒廃を意味している。ファウラーのアンソロジーではこのホールの諷刺詩が従来カントリーハウス詩の始祖とみなされてきた「ペンズハースト」の前に収められている。これは、ファウラーがカントリーハウス詩のジャンル形成を促す原因の一つに、不在のカントリーハウスを諷刺し非難する、いわば負のカントリーハウス詩の存在を考慮していることを示しているのかもしれない。カントリーハウス詩のアンチ・ジャンルの方が先に存在したということは、興味ある事実である。

しかし、ジョンソンが「ペンズハースト」を執筆したのは、アンチ・ジャンルに対して正のそれを目指したのみではない。宮廷仮面劇作者としてジェームズ I 世の寵愛を受けていた彼は、個人的な詩人として別の動機がなかったわけではないが、国王の政治的な意図への反応としても新しいカントリーハウス詩というジャンルを、ホラチウスやマルチアリスなどのローマ詩人の伝統に準拠して英国の文学へ導入し、貴族階級の本拠地である田舎における村落共同体へのホスピタリティーの美徳を称揚したのではないだろうか。

ジェームズ I 世は1603年に英国の王位を継承するや否や帰郷令の布告を2回にわたって出した。修道院解体後は地方における貧民への施しは、修道院から貴族の義務 (noblesse

oblige) へと移っていたが、実際は、ホールが風刺した通り、エリザベスの治世より主人不在の屋敷が多くなったため、地方の疲弊は深刻な状況であったからだ。そのため困り込みで土地を失った農民もロンドンへ押し寄せ、疫病が流行し、ジェームズⅠ世は同年中にロンドンの劣悪な住環境への取締り(1603年9月)、浮浪者の強制退去の布告の強化を出し、新しい建築を規制する布告を出すなどロンドンの人口の膨張を大いに懸念した。

田園に大邸宅を建てた人々の中には、建築に費用が嵩み国王の巡幸ならいざ知らず、村落共同体への供給をする余裕はなくロンドンに住んでいた者もいた。従ってジェームズⅠ世とチャールズⅠ世が共に出した複数回の帰郷令も実際には効果が無く、そのような悪循環の繰り返しだが、1630年代の終わり頃不穏な社会情勢に貴族達が田舎へ帰り始めるまで続いていた。

このような世の風潮に染まらずに、中世以来のマナーハウスを核に必要なに応じて増築をしながら作ってきたつつましいカントリーハウスに住む貴族も存在した。フィリップ・シドニー (Sir Philip Sidney) 卿の弟でケント州のペンズハースト邸の主人、ロバート・シドニー卿の真のホスピタリティーを称えたのはジョンソンであった。屋敷の中心的な場所である中世風の大広間で開かれ、村人たちがこぞって参加する祝宴がシドニー卿のホスピタリティーの真骨頂であった。「ペンズハースト」は、ジョンソンがこの屋敷に滞在したことに対する礼状で、詩人は擬人化された屋敷へ語りかけ、主人のメトネミーである家の賛美がとりもなおさず主人の賛美なのである。質素なペンズハーストの家の外観を、豪華さを誇示する他の新興の大邸宅のそれと比較することから詩は始まる。

ペンズハーストよ、お前は黒大理石や、白大理石で人の羨望を招く外観のために建てられてはいない。輝く列柱や金でふいた屋根を誇るのでもない。

人の口の端にのぼる小塔や、階段や、中庭はないけれども、古い建物として立っている。あの様な屋敷は妬まれるが一方おまえは尊敬されている。

おまえは土地、空気、森そして水などのすぐれたしるしを享受し、その中にあって美しいのだ。(ll. 1-8.)

ペンズハーストは、質素ではあるが、実用のために建てられ、古い歴史を持ち、この地方で産出する石材でできている理想の家で自然の中に立っている。ここには、外観 VS 実用、新 VS 旧、外国 VS 英国地方 (自国)、人工 VS 自然などの二項対立的比較が否定の措辞を用いて表現されている。Thou are A. とわずに Thou are not B, but A. 「お前はBではなくて、Aである。」この表現は、ローマのカントリーハウス文学の伝統に既に存在した。「ペンズハースト」に続くカントリーハウス詩には程度の差こそあれ、この否定による定義が様々に用いられている。そのレトリックには、Bにたいする批判が含まれると解釈できよう。16世紀末に風刺詩が禁止されて、カントリーハウス詩はある意味で、それにかわる場を提供することになっていたかもしれない。イタリア産の白や黒の大理石を建築資材に使い、イタリア風の柱が並び、屋根の上の小塔や、この頃作られるようになった階段や、中庭のある、豪勢な外観のけばけばしいジョンソンが眉を顰める家は、流行していたイタリアのネオ・クラシック風の建築のスタイルであった。建築の詳細は、ペンズハーストに最も近いカントリーハウスの隣家である (8マイル離れた所にある) ノールズ・ハウス

(Knole's House) のそれと符合するらしい。

実はシドニー卿も時流と全く無縁ではなく、隣家の大規模な改築を意識して、国王の巡幸の宿をつとめるべく、当時の流行の long gallery を増築するなどペンズハーストの改築に努力した。妻のもたらしたウエールズの土地を処分し、解体した修道院の資材で鉄工所を作ったりしたが、彼の経済状態は苦しく、詩の中にも言及されている石の塀を作るにとどまった (1612年)。結局は、ジェイムズ I 世の巡幸の宿からはずされ、この結末は当時の社会が農業経済から貨幣経済に既に移行しつつあった時代における、宮廷の権勢家ではない官僚の限界状況とジェイムズ I 世の帰郷令の政策の本質的な破綻を物語っている。クリスマスを前にした11月頃布告された数回の帰郷令は、国王に対してではなく、農民に対するホスピタリティーを篤くし農村を立て直すことを富裕階級に奨励するものであった筈だ。絶対主義の王権が強化されるにつれて、豪華な外観を誇る広大な邸宅は、農民への祝宴を開くことなく、国王の巡幸を受け入れる時のみ、貴族達は田舎へ戻っていた。

カントリーハウスの自己定義が、しばしば否定のレトリックを含む言説によらざるを得ず、一見口ごもっているもう一つの理由は、17世紀初期には、このように政治的経済的諸矛盾がカントリーハウスという場において衝突し、文学的テキストの中では解決不能な新しい状況を作り出していたからではなかっただろうか。

そのような事情を抱えていたカントリーハウスは、多分ほかにもあったかもしれない。敢えてペンズハーストが選ばれた理由は、1612年にジョンソンのパトロンであった宮廷の有力者、ロバート・セシル卿が亡くなり、新しいパトロンを探していたジョンソンの詩人としての野心と関係があるかもしれない。¹⁰⁾ 文武両道の理想の具現者であったフィリップ・シドニーの一族の住む、温かいホスピタリティーで名高いペンズハースト邸は、一方ではジェイムズ I 世の帰郷令の政策の本来のあるべき姿そのものであった。文学的にも政治的にもジョンソンのペンズハースト邸の選択は正しかった。隣家の改築には勝ち目が無く、狩猟のための猟園が不十分という理由で国王を迎えることもできなかった失意のシドニー卿を慰め得るのは、ペンズハースト邸とその村落共同体の間の理想的なハーモニーであり、その象徴である大広間における農民達への大パーティー開催という古式床しいホスピタリティーへの正当な評価を通じての卿の賞賛であったかもしれない。

「ペンズハースト」自体は、次のように、4つのセクションから成る。1) 屋敷の外観：8行 2) 領内の自然の豊かさの描写：36行 3) 大広間の大宴会：44行 4) シドニー卿の家族：14行 この屋敷の主人を多分パトロンとする煉瓦職人の息子という出自の詩人の身分では、ジョンソンは家の内部では大広間に入るのが精々であったかもしれない。けれども、この詩の構成から明らかなように、2) の豊かな自然の恵は殆どすべて3) の大広間の大宴会のテーブルにのる沢山の御馳走になる事実を考慮すれば、102行のこの詩の約8割に当たる80行は(極論を恐れなければ)殆ど大広間における農民達を招いての大パーティーについてであるといえよう。

ペンズハーストはやはり秩序ある自己充足的な空間であった。領内の北端の築山から南のメドウェイ川まで高地から低地へと、実際のトポグラフィーをめぐって各々の場所の自然の豊穡は賛美されている。今までに指摘されていないようであるが、重要であるのは、ケント州の片隅のペンズハーストというローカルな自然の中に、ヨーロッパ的神話の世界が侵入し、樹や森の精、酒を飲んで赤ら顔のサテュロス、パンやバッカスが賑やかな祝祭

を開いており、それがこの詩の中心的なテーマとなる広間における村落共同体の人々を招いての宴の予徴として機能していることである。

ここで想起すべきは次のようなマーカス (Lear Marcus) の指摘である。1611年から1617年頃までのジョンソンを始め王党派の詩人達は、1618年に出版された『スポーツの書』(Book of Sports) でジェイムズ I 世が称揚した public mirth, 即ち、英国古来の民衆的な娯楽の数々、たとえばモリスダンス、五月祭、洋弓などの擁護を詩のテーマに選んでいた。¹¹⁾ ジョンソンの祝祭の賞賛も、ジェイムズ I 世の意向を少なからず反映するものであったと言えよう。

さらに、ペンズハーストの自然は、当主の亡き兄フィリップの誕生を祝して詩神ミューズが集まった文学の世界であり、また家族の歴史も刻印された文化的空間でもあったが、既に述べたように、何にもましてその生産物を大広間の祝宴に提供する空間である。森、牧場、池や川、そして川岸は、存在の鎖の秩序も正しく、各々の場所に応じた生き物を豊かに産みだした。注目すべき点は、その自発的豊饒性であり、鳥や魚や動物が、自ら人間の方へ身を差し出していることである。

“When thou [Penshurst] wouldst feast, or exercise thy friends.” (l. 21)

(「おまえが祝宴を催したり、友人達を招いて鹿狩をする時には」)

「川の兩岸は各々お前に兎をもたらし、高地・アシュアやシドニーの繁みは、お前の飲み食い自由のテーブルにまだらの脇腹をした鮮やかな色の雉を与える。」(ll. 25-28) 絵のような鶉はどの野原にもおり、「お前の食事のためには、喜んで殺される。」(ll. 29-30) 「太った古い鯉はお前の網の中に入ってくる。」(ll. 33)

人間の食卓へ自己犠牲的に自らを進んで捧げる自然という観念は黄金時代の豊饒神話の一部である。ジョンソンはペンズハーストの自然すべてが、この館の中心的な祝祭空間のテーブルへ収斂する有様を、ローマの詩人達を引用し現実を神秘化しつつ描写した。

果物も季節毎に豊かに実り、子供の手も届きそうな塀の上に垂れ下がる。庭については、花の豊かさに言及するのみで、当世風の整形庭園という最新のトピックを排除し、屋敷の内部についてはその当時でさえ既に過去のものとなっていた中世風の大広間を家の中心的な空間として描写する (ll. 48-71)。

建築史的には、中世の住居は大広間を中心に造られていた。それは、応接間、食堂として、宴会や舞踏会場として、また使用人の寝室として、いわば多目的室であり、そこから各機能毎に部屋が独立分化していくプロセスが中世を通して見られた。大広間は3階の高さの吹き抜きで、中央の床には炉が作られ煙を屋外へ出すために、天井には小屋根が露出していた。ともすると大広間は煙で一杯になるばかりか、雨も雪も降り込んだ。実は、この頃には既に不快なこの種の炉は壁にとりこまれ、煙突で煙を室内から排除する快適な暖炉にとってかわられていたことが多かったのだ。

ペンズハーストの昔ながらのままの大広間は、このようアメニティーの悪い条件であったにもかかわらず、主人と奥方そして村落共同体の農民など「すべての人々」が集まり、道化までくりだして賑わう陽気な一大祝祭空間となった。彼らの手に手づさえる自慢の作物や素朴な菓子などと、ペンズハーストの自然の自発的豊饒の恵みにあふれる食卓のもて

なしとの間に、一種のポトラッチによるコミュニケーションが成立する。

But all come in, the farmer, and the clown,
And no one empty-handed, to salute
Thy lord and lady, though they have no suit.
Some bring a capon, some a rural cake..... ("To Penshurst," ll. 48-51.)

...whose liberal board doth flow
With all that hospitality doth know!
Where comes no guest but is allowed to eat,
Without his fear, and of thy lord's own meat:
Where the same beer, and bread, and self-same wine
That is his lordship's, shall be also mine..... ("To Penshurst," ll. 59-64.)

つまり、領主も領民も客も同じ酒や食物を食べることにより、両者の距離は物理的にも心理的にも拒絶され、相互の差別が払拭されて、平等を感じ合う瞬間が成立し、領民のエネルギーはここで解放される。カネッティの言う「開かれた群衆」ともいえるペンズハーストの村落共同体の人々は、祝宴の儀式の中に示される真のホスピタリティーによりシドニー家の私有財産に対する破壊性や本能的拒絶を昇華することになる。この状況こそがジェームズⅠ世の public mirth 称揚の理想とする田舎における community festivity のありようであった。常備軍を持たない君主にとって、暴動の危険の少ない、かつ非常時に役立つ兵士の予備群は必要であったのだ。

大盤振舞の宴の次の日には厳しい労働が待っている農民達の現実を自発的豊饒性により隠蔽しているとウィリアムズ (Raymond Williams) は小農民の視点から非難したが、¹²⁾ 各マナーの生産力を保つために彼らの労働意欲を維持するにも、ハレの日としての祝宴の儀式は必要であった。

このように秩序ある豊かさを持ちながら、奢侈に走らない農耕詩的ユートピア世界を表出する戦略の背後には、一連の帰郷令に示されている、政治的統一体としての最小の単位であるカントリーハウスの行う大広間における祝宴などによる平和な支配を通じて国家の統一を目論むジェームズⅠ世の政治が潜んでいる。

カントリーハウス内部の階級組織自体も変貌していた。以前、カントリーハウスの家政はジェントリ階級の出身者がスチュワード (家老職) をつとめたが、修道院解体以後、彼らは土地を手にいれて富裕になり独立したため、代わりにヨーマンの人々がその職についた。主人と召使の間の中間の階級が抜けてしまうと、カントリーハウスと村落共同体の社会的諸関係、即ち権威、権力におけるダイナミクスも影響をこうむった。そのような変化の下で、カントリーハウスの支配下にある村落共同体のシステムを運営するためには、新たに、従来とは異なる正当化が必要であった。その手段こそが、時代にとり残されてしまったかのように見えた中世風の大広間における祝祭を通じてカントリーハウスと村落共同体との間に、真の意味でのよきコミュニティを形成することであったのだ。主人のメンタリティーの理解者であったジェントリーが上級使用人である内は、農業経営もジェント

リーのスチュワードに任せることができた。「農夫ピアス」(*Piers Plowman*)の次の引用などにあるように14世紀の後半には、カントリーハウスの主人一家は、家族としてのプライバシーを求めて、大広間から階段をつけてできた二階のパーラーやグレート・チェインバー等壁型の暖炉のある快適な部屋で食事をとったり、客をもてなす習慣ができ上がっていたのである。

何曜日であろうと……広間は荒れ果てている／そこには領主夫妻も座りたくないのだ。／今や金持ちは自分たちだけで食事をするにしている／貧乏人のために思い……奥まった居間で、／あるいは煙突の付いた寝室で、そして大広間は放って置かれるのだ／そこは食事のための場所、食客のための場所だったのだ。¹³⁾

従って大広間は特別の場合を除いて召使いの食堂となり、かつてカントリーハウスの中心であった建築空間には早くも分節化が進行していた。広間は村落共同体の大勢の人をもてなす場所であるよりは、むしろ単なる玄関として機能する空間に変化したのであった。

このような階級的経済的諸条件の及ぼしたカントリーハウスの建築自体への歴史的変化を考慮すると、ジョンソンは「ペンズハースト」において、当時の大邸宅とペンズハーストの対立を「見せかけの家」と「実用の家」の二項対立として提出しているように見えるが、実際は、村落共同体とのあいだに調和のある良きコミュニティを維持している家と、そうではない家との差異を重要な問題にしていたのだ。しかし、現実に変化していた多くのカントリーハウスの実状に較べると、それも既に一種のアナクロニズム的なノスタルジアをこめた、かつての良き時代への回顧でしかなかった。ジェイムズI世の帰郷令もまた然りである。

一方でジョンソンは、まだ、カントリーハウスを社会がその上によって立つ重要な理想や価値観を発信する必須の中心であると考えていた。彼のパトロンであった時の宮廷の有力政治家ロバート・セシルの豪華なシボールド邸で、主人のテーブルとは異なった食物や酒を振舞われて、詩人としての誇りを大いに傷つけられた自分自身の経験へのあてこすりも含めて、ペンズハーストという誰もが平等にもてなされるカントリーハウスに真のホスピタリティーの存在する田園の理想のコミュニティの姿、ウオットン卿(Sir Henry Wotton)の言葉を借りると「全世界の縮図」("An Epitomy of the whole world")を創出した。¹⁴⁾

同じくジョンソンによるもう1篇の詩「ロバート・ローズ卿へ」は、「ペンズハースト」と同じ詩集『森』(*The Forest*, 1612)に含まれ、ミドルセックスにあるダランツ邸(Durrants)の主人、ローズ卿に宛てられた、人生のアドバイスの手紙の形をとっている。この詩は「ペンズハースト」と違って、悪しき家とダランツ邸との比較ではなく、悪徳と退廃に満ちたロンドン及び宮廷の生活と田舎の無垢のそれとを対照している点で後の政情不安の時代に書かれる詩と田園への隠棲という共通のテーマを持っている。宮廷の高官のセシル族の豪華なテイプルス邸にも近い自分の屋敷で、首都や近隣の虚栄に満ちた生活に染まらずに暮らすローズ卿の美德と、邸内で生活に必要なものがすべて賄えるダランツ邸の自己充足性("unbought provision", ll. 11-12)とが賞賛されている。主人の妻、メアリはロバー

ト・シドニー卿の娘であり *Urania* (1621) というロマンスを書いた才女であった。

ダランツ邸は、16世紀の始めの頃の堀で囲まれた大きな建物であったが、詩においては、家自体について「立派な車寄せも、金でふかれた屋根もない。」と簡単にふれられているのみである。「ペンズハースト」の中心であった大広間での村落共同体の人々を招いての祝宴は詩の五分の一ほどに当たる20行足らず(II. 48-65)しかさかれていない。田舎の人々は、高貴なロース卿の妻に迎えられ、彼女の親族とも分けへだてなくテーブルにつき、彼等の無礼も許される祝宴はペンズハースト同様、貴族の真のホスピタリティーの精神に満ちているようである。

The rout of rural folk come thronging in
 (Their rudeness then is thought no sin):
 Thy noblest spouse affords them welcome grace,
 And the great heroes of her race
 Sit mixed with loss of state or reverence:
 Freedom doth with degree dispense.
 The jolly wassail walks the often round,
 And in their cups, their cares are drowned: ("To Sir Robert Wroth," II. 53-60.)

とはいえ、祝宴を眺める詩人の目は常にシドニー族 ("the great heroes of her race" I. 56) に注がれている。大広間における祝宴の情景は、「ペンズハースト」が描き出した農民達の味わう楽しさではない。むしろ、貴顕の人々が常日頃裁判の勝ち負けや、弁護士のコツの捻出などの煩わしさを、すべてビールの盃の中に束の間でも忘却する黄金時代のような幸せである。ダランツ邸では、「ペンズハースト」のような村落共同体の人々との素朴な贈り物を通しての積極的な交流はなく、領主と農民との間には無礼講が許される程度の形式的な関係が保たれ、両者の良きコミュニティーの形成には消極的である。「ペンズハースト」のホスピタリティーの精神はここでは形式に墮している。ロース卿は、確かにシドニー卿のように家に「住む」主として、ダランツ邸に住み農民達を招いて宴を催し、ジェームズ I 世の帰郷令を体現していたが、彼にとってカントリーハウスの中心の場所は、既に大広間ではなく、四季に渡って獲物を提供するダランツ邸の自然であった。

ロース卿は、スポーツマンで狩りを好み、戸外で1年中狩をして、疲れたら木陰で眠り、夜のしじまに、鹿の鳴き声を聞くライフスタイルをとっていた。彼の領地はロンドンの北方の狩猟に適した場所にあったので、狩猟の好きなジェームズ I 世もここをしばしば訪れ、("for it, makes thy house his court." I. 24) ダランツ邸の建物の屋内空間は、ジェームズ I 世の宮廷という社会的空間に変じた。もともと、ロース卿の私的な安らぎの空間は自然のささやかな木立の下につくられていた。ダランツの森や牧場をぬって流れる川のほとりの木立の涼しい木陰は、ロース卿に家の中の寝室より安らかな眠りを与え (II. 17-20)、木陰は、恰も彼の真の休息のための寝室であった。(II. 18-20.) この一種の自然への逃避の心理は、後に王党派の詩人達が清教徒革命で混乱する世界から去り、木立の下にこそ心が安らぐ私的な小部屋を見いだす心情を先取りするものがある。一方、ある意味では、それは1618年の『スポーツの書』の目指す方向とパラレルな方向に向かっていた。

ベン・ジョンソンのサークルに属し、17世紀の最大の叙情詩人であるヘリックによって書かれた「ルイス・ペンバートン卿への賛歌」は、彼の他の詩と同様に執筆年代を限定することが困難であるが、パネジリックという形式及び詩の内容は、ケアリの2篇のカントリーハウス詩よりは、はるかにジョンソンの「ペンズハースト」に類似しているため、1640年頃よりむしろ1617年に近い時に書かれた可能性が高いように思われるので、ファウラーの推定とは違って、ケアリの詩より先にこの詩を論じたい。¹⁵⁾ヘリックは、ノーサンプトン州のラシデン(Rushden)邸の大広間における村落共同体との祝宴をジョンソンのホスピタリティを重視する精神を継承しつつも、貴族化されたいわば文化的な雰囲気をもった、今までに述べた二つの祝宴とは異なる姿で、多分カントリーハウス詩群の中で最もいきいきと描き出した。ラシデン邸への滞在に対する礼状の形式のパネジリックという点で、ジョンソンの「ペンズハースト」の伝統を踏襲している。

ジョンソンが大広間を中心とする同心円的な宇宙のマイクロコズムとしてのペンズハーストを描く時、屋敷をとりまく自然の描写から始めたが、ヘリックは人の出入りの多さをはっきり証明する「すり減った敷居」(“the worn threshold” l. 5) から入って、まず台所におけるホスピタリティを賛美する。現在でもカントリーハウス見学の一つの見所はその家の生活のインデックスである台所である。ヘリックは単に家の裏側への好奇心を働かせたのではなく、大広間における祝宴がカントリーハウス経営の中心であるとすれば、その重要な後方支援は自然の産出する材料を料理する台所であることを認識していたのだ。料理はすぐれて文化的な行為である。

1629年以降ならば、田舎牧師であったヘリックの視線は、まず「油で養われた煙の漂う寺院」(“The fat-fed smoking temple” l. 6) を見ている。ラシデンでは、たまさかの広間における宴のためにだけ使われるのではなく、台所はいつも料理が盛んに行われているのでその油がしみ、今も火がたかれて料理の最中で、煙がたちこめる。肉の焼ける健康で香ばしい匂いが人の食欲をそそり (ll. 7-8) 全くの見知らぬ人や農夫 (l. 11) や貧民 (l. 14, 17) の飢えを満たす時、台所はその慈善の精神によりその卑近な場所性が聖化されて真の寺院となる。このように、ラシデンのホスピタリティは、大広間に集まる農民達ではない、もっと多くの通りすがりの飢えた貧しい人々にまで及んでいた。

祝宴の日々には、屋敷の門、“warm-love-hatching gates”) は、朝早くから夜遅くまで開放され、大勢の人を歓迎する。ラシデン邸のホスピタリティへの賛辞は、リアルな描写で他の屋敷の躰の悪い召使い達の客に対するの無礼な振る舞いとラシデンの召使いの礼儀正しいそれとの比較に始まる。

良いマナーで、感じよく給仕をうけ、気前の良いごちそうが振る舞われること、特に、祝宴への出席者が、誰も特別扱いをうけず、すべての人が平等に扱われ、主人も客も同じ食物を供される真のホスピタリティが、ラシデン邸の広間では実現されていた。

(ll. 57-60) ヘリックは、いわば、カネッティの言う「開かれた群衆」であるラシデン邸の広間の宴に出席している農村人々の様子を、さらに具体的に描写している。不死の妙薬でもあるワインは、人々に大騒ぎを演じさせない。不機嫌で酒を飲んだり、決して堅苦しいものではなく、はめをはずしすぎたの後悔もない。(ll. 87-88) ワインは、バラのつぼみのように顔を染めた人々の楽しみにぴりっとした機知を与え、その機知が逆にワインに色彩を与えるのである。勿論、村の素朴な客人達は、はにかみつつも主人夫妻への敬

意も忘れない。この宴の最後は、主のペンバートン卿自らが先頭に立って優雅な楽しいダンスでしめくくられたのであった。

But as thy meat, so thy immortal wine
Makes the smirk face of each to shine,
And spring fresh rosebuds, while the salt, the wit
Flows from the wine, and graces it:
While reverence, waiting at the bashful board,
Honours my Lady and my Lord.
No scurrile jest; no open scene is laid
Here, for to make the face afraid;
But temperate mirth dealt forth, and so discreet-
ly that it makes the meat more sweet;

(“A Panegyrick to Sir Louis Pemberton,” ll. 71–80.)

決して放縦に墮するのではなく、しかもウイットに富み、礼儀正しく、秩序ある、節度を心得た宴は、ペンバートン卿と農民達の間に良き共同体を形成していた。帰郷令や『スポーツの書』により、ジェームズⅠ世は、カントリーハウスを地方の農民支配のための一つの政治的装置とみなしていたかもしれないが、ラシデン邸の広間の宴は、単なる政策の一環であることを超えて、カントリーハウスを中心とした一つの普遍的な真の意味での共同体のあり方の理想を表現している。ホスピタリティの根本は慈善の心であるが、それも豊かさを産み出す農地経営の上に成立するものである。

ヘリックの人生への深い洞察がそれを見抜いていない筈はないが、彼はペンバートン卿の経営の才には全く言及せずに、宗教人らしく卿の宗教を根本とする高潔な人格こそがラシデン邸をあらしめているのだと、卿への賛美を惜しまない。ヘリックは、家を主のメトニミーと見て家を賛美することにより、主を賛美するというジョンソンの賞賛の言説を逆転した。ラシデン邸をあらしめ、運命に立ち向かわせているのは、耐久性に限りがある物質的な桱材や大理石ではなく、家の主ペンバートン卿の美德であり、家の基礎も卿その人にあるのだと賛辞を呈している (l. 104)。ヘリックは、また、ペンバートン卿の富も宗教的に正当化している。領民の誰にも恨まれる所業のない高潔な卿の領地のすべても、彼の平安と彼が天国へ至る道のためにある。彼は自分自身のうちに神を宿し、善人の縮図である (ll. 131–135)。

ジェームズⅠ世の貴族やジェントリーに対するロンドンからの帰郷政策は失敗したまま、チャールズⅠ世の時代に移りケアリは2編のカントリーハウス詩を書いた。1625年にチャールズⅠ世の治世になってからも、最初の「サクサムへ」(1631–2)の執筆までに5回ほど帰郷令が出された。サフォークにあったクロフツ (Crofts) 家のサクサム邸は王政復古後チャールズⅡ世の訪問に備えて新しい棟を増築した事実からすれば、余り大きくないが、堀のついた美しい屋敷であったらしい。ジョンソン派の宮廷詩人ケアリはクロフツ家の息子と共に外交官として外国へ行くなど、同家とは親しい関係であった。「サクサムへ」は「ロース卿へ」の冬の季節の設定をとりいれて、時は春の季節というカントリーハウス

詩の常套を破っている。詩人の視線は最初から雪と霜により外界から閉ざされていた屋敷の内部へ向かっていることに注目する必要がある。彼は屋敷の内部自体に、サクサム邸の領地に備わる豊かで美しいものがあるので、屋敷は「内部の幸福」(“inward happiness” l. 8)に恵まれているのであると言う (ll. 5-8)。

クロフツ卿は17世紀になって、ジェントリーから貴族へと階級的に上昇し、引き立てにより幸運を手にしてきた。そのためか詩の中で「ペンズハースト」におけるような農民への言及はない。勿論、サクサム邸に大広間は存在したが、それも詩の中で言及すらされていない。経済的に農業経営に依存度が大きくなければ、今までに見た3編の詩に歌われたカントリーハウスのように村落共同体を招いての祝宴を盛大に催す必要はなかったかもしれない。先にも引用したように、大広間での大勢での宴をはる習慣の衰退を嘆いた詩は既に14世紀後半に書かれ、建築史上も大広間の機能的変化は徐々に進行していたにもかかわらず、17世紀の初めに帰郷令と共にカントリーハウス詩という新しいジャンルにおいて大広間における宴は再び文学の中へ引き戻されたのであった。

しかし、20年もたつと、やはりそれが書き込まれずに、その存在が暗示されていたとしても、今までに決して明確に言語化されることのなかったカントリーハウスの空間が「サクサムへ」には初めて出現している。それは、この詩の32行目に現れている「部屋」(“room”)である。この個人主義的な空間は、当然、大広間の衰退と共にカントリーハウスの建築構造の中に造られていたが、それがカントリーハウス詩の中に表象として表れるまでにはこのように長期間の年月が必要であったのだ。言語の表象には人間の意識が深く関わっているとすれば、この個人空間を「サクサムへ」において表象化したのは、どのような観念であったのであろうか。

それを解く鍵は、この詩に表れている従来とは異なる貴族の自己イメージである。それが、神秘化された自然の豊饒神話を創り出し、結果的にこの詩からの大広間の排除に繋がっているようだ。サクサム邸においては、冬だからといって貯えが減らないし、春もそれにつけ加えるものがないほど豊かである (ll. 9-10)。そして、家は雪のために外部の世界と遮断された閉鎖空間であったが、繰り返し強調されているように、この家の門は外に開かれているのである。

そのようにして、寒い冬、食べ物のない時には、貧しい人々に救いの手を差し延べて、彼らを飢えから助けていたのだ。帰郷令の主張してやまなかった田舎におけるホスピタリティーを貴族の義務としてサクサム邸は実践していた (ll. 11-12)。その結果、「貧しい人々の祈りが、お前の[サクサム邸]のテーブルをほかのカントリーハウスのテーブルにも増して豊かにしているのだ。」 (ll. 11-13.)

このようなカントリーハウスにおける豊饒の起源についても、ケアリはジョンソンとは、もはやかなりちがった時代の詩人と言えるのかもしれない。ケアリはジョンソンの考えと正反対の立場であるらしい。後者は「ペンズハースト」において、秩序正しい道徳的な社会を田舎に作るためには、貧しい人々に対して貴族の義務の遂行が必要だと考え、それはジェームズⅠ世の政治的メッセージに沿う時代の急務でもあった。しかし、サクサムでは、食物を恵んでもらった慈善の御礼として、貧しい人々が、サクサムの主人への神の加護を祈るその祈りが天に聞き届けられて、神がサクサムの自然の恵みを豊かにするというのである。この論理によれば、慈善は貧しい人々へのホスピタリティーというよりは、むしろ

貴族が貴族として安泰であることを正当化するための、利己主義的な自己防衛の手段に変じている。

42行目が示すように邸内に滞在する人もしない人をも、主人も召使いも客人として歓待するのであるが、それはペンズハーストにおけるような村落共同体と共に楽しむ宴を通して真の共同体を形成するためのホスピタリティーではなく、社会的関係を持つことのない見知らぬ人を含めて、一般的な貧しい人々に対して分け隔てなく、礼儀にかなった気前の良いもてなしという慈善を行っているのである。

振る舞われるごちそうの材料は、黄金時代の自然の自発的豊饒をキリスト教化した神話により説明されている。空さえサクサム邸の巨大な鳥かごであり、まるで「箱舟」のようなサクサム邸に進んで集ってくる野鳥や動物達がいる。雪が降り、冬の洪水を避けてサクサム邸に避難する動物達は、サクサムのかまどの火に、自ら身を貢物として捧げるのである。(ll. 17-30)

ここに見られるのは貴族階級の富と自己に対する身勝手な正当化である。マクガイア (McGuire) が分析しているように、¹⁶⁾ 17世紀の冬の最中であれば、食物は不足しているのが普通であるのに、天が食物を恰もマナのようにクロフツ家の人々に与えるという聖書的イメージの使い方は、箱舟への言及も含めて、サクサムとその住人達をキリスト教的に聖化している。ペンズハーストのシドニー族は、調和のある社会のコミュニティーを維持するために必要な機能を担う人々であったが、それに反して、サクサムのクロフツ一族は、普通の人々を支配する法則にしばられない特権的エリートになっている。「箱舟、洪水」(l. 20)、羊 (l. 24) への言及はクロフツ家の人々の属する貴族という社会階級が、恣意的なものではなく、王権が神に与えられているのと同じく神の命によるもので、貴族はイスラエル人やノアのように特別の神の使命を帯びた選民であるとする意識を示唆している。

ファウラーによれば、サクサム邸では他の屋敷と違って、清教徒の人々にも分け隔てなく施しをする寛大さと気前の良さがあつたようであるが、¹⁷⁾ 詩においてはその慈善行為も聖化され、自然の自発的豊饒神話は更にキリスト教化されている。このような意識は、単にケアリが賞賛の手法として用いた文学的準拠枠のみとは言いきれず、むしろ貴族の自己イメージの聖化という貴族階級の問題を露にしていると見るべきであろう。それは、内乱の前夜に貴族の復権として知られる貴族の動き、即ち、ジェントリーやブルジョワジーの台頭により自らの社会的威信の低下を意識した故の傲慢な主張の一環であった。

従って、クロフツ家の人々は村落共同体とも祝宴の楽しさを共有して農民達との真の意味でのコミュニティーを作る必要がない。14世紀後半の『農夫ピアス』の富裕階級は使用人達からの家族のプライバシーを求めて広間からせいぜいパーラーと呼ばれる小規模な客間や寝室に引きこもつたのであつたが、約三百年後のサクサム邸では大広間という空間を中心から周縁へとずらし、中心はいわば分散されて、各自が自己へ引きこもることを可能にする複数の個室へと邸内の空間分節が進んでおり、それは当然のこととして詩において言説化されたのであった。

Water, earth, air did all conspire
To pay their tributes to thy fire,

Whose cherishing flames themselves divide
Through every room, where they deride
The night and cold abroad, whilst they,
Like suns within, keep endless day.

(“To Saxam,” ll. 29–34.)

台所のかまどの火は、かつては大広間の平戸間の炉に分けられて、使用人、家族、時には村落の人々も客も名実ともに家の中心である火の周囲に集まっていたが、サクサム邸では、その火は、各部屋に分けられ、暖炉の温もりで、冬の夜と戸外の寒さから庇護されて、屋内の部屋の数だけの内なる太陽があるように「終わりなき日」を過ごす。彼等は、時間や季節を富によって克服し自由を得ている。17世紀になって生活のアメニティーに対する意識が高まったのは事実であるが、サクサム邸が、暖炉の火をふんだんに所有することによって冬の厳寒を「嘲笑う」という表現に、クロフツ一族の富への自信の大きさに対するケアリの賛賞を読むことができる。

注目すべきは、カントリーハウス詩の中で初めてなされたこの“room”、即ち、「個室」という私的で個人主義的な空間への言及は、多分、莫大であったと思われる経済力に裏打ちされたクロフツ家の人々の貴族としての自己イメージの変容によって、大広間を重要な場所としてきたカントリーハウスの空間分節化のあり方が大きく変化していた事実を示していたことである。ハードウィック・ホールでは、既に16世紀の終わりに大広間が単なる玄関となっていた事実は良く知られていた。

サクサム邸の夜を徹する光は、暗闇の戸外の人を導き入れるのみであった。そして、ここから読み解くべきは、外部の混沌とした状況に秩序を回復するため、外へ出て積極的な寄与を行わず、雪や霜で閉ざされて領内の自然とも切断され、個室の内部で自己へ引きこもるサクサムの孤立した個人主義にほかならない。

チャールズI世治下、ロード・ストラッフォード体制の政治的失敗の結果、「サクサムへ」から約10年後の1639年にはついに戦争が始まり、ケアリは第一次主教戦争に従軍した。寒い冬にスコットランドの山中で苦戦を強いられた後、彼はパトロンの一人であるケント伯ド・グレー卿所有のベッドフォードシャーにある15世紀に建った、カントリーハウス、レスト邸に滞在して休養をとった。その間に屋敷から、友人のG. N. (Gilbert North) に書いた書簡詩が、ケアリの2番目のカントリーハウス詩「レスト邸より友人G. N. へ」である。

この詩には、平和と戦争の対比が、レストとスコットランドの山中の、春と冬、春風と嵐、光や暖かさと夜や寒さ、自然の豊饒と不毛などの二項対立などで語られ、内乱期の王党派の詩人達の叙情詩の言説の枠組みが既に見られる。外の嵐を避けて田舎へこもるライフスタイルに内乱の間王党派の人々が選んだ生き方を垣間みさせる態度がのぞいている。豊饒性に富んだレストの領地は女性に擬人化され常春の地上楽園として描かれ、ケアリ独自の感覚的で官能的なイメージが駆使されている。そのような楽園に立つのは、家の核である暖かく燃える暖炉のある、そして温かい心で人を迎える“a house for hospitality”

(l. 24)であった。レスト邸への賛辞はここに収斂する。1620年代の遅くには、グレー伯夫妻はチャールズI世の宮廷から引退してレストに住んでおり、当時の宮廷人の最も輝かしい男女や詩人達の集まる場所となっていたのだ。

このような状況が、レスト邸のカントリーハウスとしてのあり方を規定したのか、レストはペンズハーストとサクサムの中間的な性格を帯びている。前者は、中世的な大広間がまだ宴を通じて村落共同体を掌握するという機能を果たす元型的なカントリーハウスであった。後者はもはや宴の開催を行わず、村落共同体の貧者にも、見知らぬ困窮者にも慈善を施す程度の地域とのつながりを保つが、外部からは殆ど孤立していた。一方、家の内部では、中心はパブリックな場所からひきこもりを可能にする奥まった個々の私的空間へと入って行く一方、経済的自立性を高めて、村落共同体を基盤とする農業経営にのみ依存せずに、市場へ進出も可能な逆のベクトルを合わせ持つカントリーハウスへと変化していたように思われる。

カントリーハウスとしてのレスト邸の描写は、ほぼペンズハーストの賛美の言説を踏襲している。当主の妻は、ハードウィックのベスの孫娘であり、彼女の2人の姉妹の嫁ぎ先は、ペンブローック伯のウィルトン、アランデル伯のアランデルハウスという由緒ある豪華な改築中のカントリーハウスであった。このような事実への皮肉も込めて、ケアリは、15世紀の古いマナーハウスを後に改築した比較的小さく (l. 49) 質素なにレスト邸について、見せかけ対実用、人工対自然、外国対本国 (英国) などカントリーハウスのトポスをやはり否定の措辞を用いつつ枚挙して賛美を呈した。

「ペンズハースト」(1612年)より約30年後に書かれているこの詩の大広間における祝宴は、召使、小作人から貴族 (l. 51) に至る人々の一同に会するコミュニティーのそれである点では「ペンズハースト」と同じであるが、レスト邸では、その社交範囲が宮廷よりであったため、出席者は必然的に身分社会の階層的秩序に従って3種類のテーブルに分かれてつき、食物も各々のテーブルで異なった種類が用意されるという封建制の遺風を多分に残していた。召使、小作人、隣人には“wholesome meats”を、彼等より上の層の人々とレストの執事や牧師、および女性には、前者よりは良い食物“daintier cates”を、そして、「普通の人々と富や能力、官職、身分のちがう」(ll. 39-41) 人々には、グレー伯と同じ“meats/ Of choicest relish” (ll. 44-45) をという具合であった。

ジョンソンはかつて新興階級の豪勢な家が村落共同体へのホスピタリティーを等閑にする点と、祝宴を形式的に開いてもそこで身分差別をする偽のホスピタリティーを警世家としての詩人の立場から批判していた。一方、ケアリは、レンガ職人の子供として常に差別される側にいたジョンソンと出身階級がちがっているためか、レスト邸の階級差別的な宴会をそれ程異和感無く客観的に描写しているように思われる。

勿論、だからといってケアリは豪華な家に対して批判的ではないわけではない。主として見せかけと実用の二項対立に基づいてレスト邸の大広間の宴の気前の良さをほめて (l. 57-64) いる。豪壮な邸宅であるウィルトンやアランデルの庭やギャラリーに置かれた、富を誇示する虚栄のシンボルである沢山の装飾的な石像よりは、大広間で客を歓迎するレスト邸の生身の主人夫妻の振る舞いを称賛する。前者の (ll. 31-33) 庭やギャラリーに飾られた酒の神バッカス、穀物の神ケーレスなどの石像よりは、レスト邸のテーブルに酒が十分出され、穀物は料理になって振る舞われる方を評価している。

また、虚飾を拒否するつましいレスト邸の建物自体は、自然を重んじて建築家のart (技術) を否定した点では (l. 20-21) (“an useful comeliness/ Devoid of art”) ジョンソンのカントリーハウスの哲学の正統を受け継いでいるが、家の外部では、自然が「自然の侍女

としての人工」を導いていた。(ll. 70-71) 実用の原理はレストの地上楽園の中に既に自然と人工とを共存させて、レスト邸は二重の円形の堀に取り囲まれてこれに浮かぶ「島の家」“island mansion”となる。

In snaky windings, as the shelving ground
Leads them in circles, till they twice surround
This island mansion, which, i' th' centre placed,
Is with a double crystal heaven embraced,
In which our watery constellations float,
Our Fishes, Swans, our Waterman, and Boat.....

(“To My Friend G. N. from Wrest,” ll. 78-82.)

サクサム邸の外部空間からの分離が、冬という季節に由来する比喩的な性質を持っているのと較べると、レストのそれは、恒久的な事実である。中世の堀を埋め、積極的に人工を加えて、灌漑用水の設備に作り直し、地形の変形は恒久化された。それによって家は村落共同体から独立し分離して、さらに孤立性を深めている。永遠と完全のメタファーである円形の堀の流水と空との2つの天の中央に位置する「島の家」には、ルネッサンス時代の人々の考えていた至福の島として英国のイメージとが重なり合う。しかし、レストは、新しく到来すべき時代へ顔を向けている家でもあった。あるべき英国の縮図であったカントリーハウスは、少しずつ変質を遂げていたのだ。

農業改革の結果、レストの自然は、春と秋とが同時に存在するように豊かな恵みを受けるようになった。荒蕪地は水を得て農地となり、植えられた果樹は根から二重にとりまく堀の潤沢な水を吸って (ll. 89-90)、豊富な果物を生産する。カントリーハウスの消費を上回る余剰の果物は市場へ行くことになった。堀の岸辺に腰を下ろすウエルツムナス (Vertumnus) は、季節の推移を司る神であると同時に、商業の神でもあるのだ。(l. 93)

レスト邸の自己充足性は古来の美德ではなく、農業革命の結果に支えられるようになると、村落との間に良いコミュニティーを形成することは、重要な意味をもってくる。ド・グレー一族は当主の子供たちの世代が宮廷人としての生活を送っていたため、封建的階層秩序に敬意を払った、古めかしい祝宴を大広間で開く必要があったが、それと同じほど、農業経営に必要な労働者としての農民達との間に良い関係を結ぶべきであった。大広間の3つに分かれたテーブルは、昔ながらの階層秩序が支配しているように見えたとしても、その内実は違った社会的現象を内包していたのだ。国家の地方政策を超越したコミュニティーを維持したド・グレー伯は、農業改革の先兵として、中世的な堀を近代的な灌漑用水に変えて、資本主義的な農業経営にもりだしていた。その結果、レスト邸は意識的にも地理的にも、私的閉鎖空間性に高める一方、農村という生産の場を管理して市場へ開放された、近代の方向へ向かう社会的空間にもなっていたのである。

ジェイムズ I 世以来、度重なる帰郷令や『スポーツの書』(チャールズ I 世が1633年に再び出版)によってカントリーハウスを中心とした地方(田舎)の共同体へのコミットメントを促す政策的要請があったにもかかわらず、サクサム邸とレスト邸とはそれぞれ道は異なっているが、チャールズ I 世の政治的メッセージとは少なからず乖離した方向へ進ん

でいた。共同体としての生活よりもド・グレー伯は新しい投企を目論見、階級に求められる普遍的理想の実現による自己定義よりは、クロフツ家はプライバシーを追求する個人主義に徹することを望み、各々のカントリーハウスの空間的変化を引き起こしていた。それは、大広間の再評価と個室の出現であった。

さらに新しい観念は、部屋をカントリーハウスから切りはなして、庭園に出していった。封建的領主として地方官吏的役割を遂行すべく、大広間の祝宴を主催する気前の良いカントリーハウスの主人であるよりは、自分の教養に即した洗練された趣味の喜びに専心する“virtuoso”である方を選ぶメンタリティーはラブレイスの「アミンタのグローブ屋敷」(1641年)に表現されている。

アミンタはポーター (Endymion Porter, 1587~1649) のパストラル名である。彼はローワー・ジェントリの出身であったが、チャールズ I 世夫妻の寵愛を受け、チャールズ I 世の絵画の収集も行った。大陸で絵画を買い集めたり、宮廷でも多忙を極めたので、彼はロンドンに単身赴任していた。この詩でグローブと呼ばれる彼のハートフォードシャーのカントリーハウス、ウッドホール (Woodhall) は妻子オリーブ (クロリス) と二人の子供の住居であると同時に、多額の費用を費やして彼個人で収集した絵画を陳列する私的美術館でもあった。従ってこの詩のグローブ邸は、もはや農村のコミュニティーへのコミットを行うわけではない。カントリーハウスの主人夫婦の結びつきを基本にした、様々な意味で殆ど近代の、いや現代の核家族の家に近いあり方が見て取れる。

グローブ邸の自然或いは領地全体のアイデンティティーはもはやジョンソンのように黄金時代の神話の神々ではなく、家の主の美徳でもなく、妻の美しさにあるのである。グローブ邸は、彼女の「全ての輝かしく美しく甘美なものが出会っている天国」なのである。招待を受けた詩の作者ラブレイスは喜んでこの屋敷を訪問し、邸内の各部屋を見て回る。

ファウラーによれば、この詩は収集 (collecting) のトピックを導入した最初のカントリーハウス詩である。¹⁸⁾ 絵画に鋭い鑑賞眼を持っていたポーターの収集した絵のコレクションが屋内にあったことは、「小部屋」(“Cabinet”, 148) (“wall”, 50) などの言葉から明らかである。しかし、当時の収集品は庭と関係したところに置かれることが多かったので、必ずしも屋敷の内部ではなく、庭のパビリオンか半ば戸外の場所のどこかににあったと推測されている。プライバシーを確保するために私的な空間は家屋の奥深くへ引きこもろうとするのみならず、一方では屋外へも逃げだそうとしていた。

多分、ラブレイスがこの屋敷を訪問した時に主のポーターは不在であったと推測されるが、彼の所蔵していたイタリアルネッサンスのティシアン、ラファエロ、ジョルジオーネなどの素晴らしい絵画を鑑賞して、詩人は「画家たちのアート (芸術) は自然を凌駕するものである」(ll. 31-32) と感動を述べている。

自然よりアート (芸術) の価値を優れたものと見るこのラブレイスの新しい見解は、ケアリが自然を導く自然の侍女である人工 (灌漑の設備) を神話化しつつ賞賛したのを更に進めて、自然はむしろ人間の芸術によって征服されるべき不完全なものとみなしている。即ち、自然を常に人工より優ると考えたなどジョンソンの代表する貴族の伝統的な自然観とは対照的に、自然はもはやエリート貴族の主張を支援強化する力ではなく、人間の技術によって征服されねばならない欠陥のある変化するものであるという見解である。このような自然観をもたらした背後には、当時の社会動乱における貴族階級の力の相対的な地盤

沈下があったのである。1629年の長期議会解散以来のロード、ストラッフォード体制下の政策的破綻に起因する英国の政治的混乱は激しく、この詩の書かれた1641年頃は翌年から始まった内乱に向かって、王党派と議会派の対立は深刻さを増していった。

ポーターやラブレイスのような王党派的な人達の政治的な失望の念は深いものがあった。それゆえ、ポーターの美術館に存在する芸術の自然に対する勝利を表している完全で美しい絵画は、人間のように話したり見る力があれば、人間の友人よりはずっといきいきとして気品があり、誘っても後悔しない仲間となる (ll. 33-42)。そればかりか、絵画は、神のように崇拜される。絵画は墮落した自然を完全なものに直し、墮落以前の世界へもどす神聖な力を持つ「全く神様のような聖人」(l. 45) であるのだ。絵画を部屋に掛ける行為は恰も聖人を「神殿にまつる」のに等しい。部屋は絵画によって神聖さを付与されて、真に愛される空間となる。ポーター自身の、そしてグローブ邸のアイデンティティーは、究極的には絵画のかけられた“the Cabinet”の存在にある。

Now every Saint clealy divine,
Is clos'd so in her severall shrine;
The Gemms of rarely, richly set,
For them we love the Cabinet.....

(“Amyntor's Grove” ll. 45-48.)

1620年頃から、貴族の男女の間で流行しだした大陸旅行は、芸術作品からメダルにいたるまで実に様々なものの収集の流行をうみだした。1620年代には、既に述べたアランデル伯、ペンブロック伯そしてバッキンガム公が、イタリア芸術のコレクションを行い、1630年代には、ホワイトホール宮にチャールズ I 世がヨーロッパで最も優れた絵画のコレクションを陳列した。その絵画を収集したのがポーターであり、彼自身の絵画のコレクションもその任にあったからこそ可能であった。¹⁹⁾

もっと身近の卑近な珍しい不思議な物などの雑多な収集を、小部屋に集めて楽しむ流行は既にルネッサンスの終わり頃にはじまっていた。しかし、小部屋の詩 (closet poem) の流行は17世紀半ば頃からであった。ここで言う closet とは、cabinet とほぼ同義と考えられ、プライヴァシーや人に邪魔されないことが必要な場合に、例えば読書、瞑想、仕事などのために使われたり、又、親密な人との会見にも使う小部屋である。ハムレットがガートルードに会ったのも closet であった。²⁰⁾

政情不安定な社会にあって、家屋の内部からさえ離れた庭園などの小さな部屋を美の神殿に見立てて、そこで真に私的な自己を憩わせる機会に主のポーターがどの程度恵まれたかはさておき、彼がそれにグローブ邸の存在理由を見いだしていたのは明らかである。1620年頃には、国王の地方への巡幸はとりやめになり、巡幸の宿になるための巨大なカントリーハウス建築の流行の第一波は過ぎ去っていた。小部屋への人々の心情の傾斜はそれに対する一つの反動であったかもしれない。²¹⁾

カントリーハウス自体も、既にみたように、17世紀の歴史の流れに洗われていた。17世紀のカントリーハウスは、社会から孤立した島になり、家の中心を広間から個別の部屋へと、また、屋内の小さな私的な部屋から屋外の特別な部屋へ、そこから更に絵画の中へと、それ自身の価値を巨大な公的社会的な大広間という空間から、より小さくより私的な個人

空間へと、内へ内へと閉じこめ、ついには額縁で囲われた絵画の小空間へとその本質を封じ込めていった。貴族階級の自己イメージの変容は、このようなカントリーハウスの建築空間の分節方法を創り出しつつ、その変化の過程に刻印されていたのである。

私的美術館で芸術の完全な世界を楽しんだ後に、大広間ではなくこのキャビネットに腰を下ろして、妻を中心とする親しい友人達の気楽な小さなパーティーが催される。53行目から71行目までのその部分は、主語が今までの一人称単数から一人称複数にかわり、筋金入りの王党派のラブレイスの顔が前面にあらわれてくる。

彼らは乱れた髪に庭の蔦や芥子の花を飾って、神話の神々が哀れに見えるほどに、彼ら自身が異教の神々となる。「乱れた髪」や「異教の神々」への言及が、窮屈なしかつめらしい清教徒の服装や教義への当てこすりであることは言うまでもない。まだ当時は高価であった煙草の煙ををくゆらせ、東洋風の酒杯を満たし、ポーターの妻のために乾杯をして、したたか酒を飲むことによって、重くのしかかる不安や心配事をも飲み込むのである。

So drenched we our oppressing cares,
And choaked the wide jaws of our feares,
Whilst ravisht thus we did devise,
If this were not Paradise
In all, except these harmless sins. ("Amyntor's Grove" ll. 67-71.)

彼らはいささか飲み過ぎという害のない罪を犯しているのを除けば、パラダイスを楽しんでいるのである。しかし、彼らは、外に押し寄せている社会的な不安や混乱を一時忘れて、単に私的な安逸や快楽に溺れて時を過ごしているのではない。また、屋内に引きこもって居心地のよい空間に身を沈め、外の世界へ秩序を回復すべく決然と行動に出ることはないこの態度を、単に王党派の退廃的なエピキュリアニズムと非難するのは早計であろう。

革命前夜の不穏な社会状況のさ中に、私的美術館の小さなギャラリーでイタリアルネッサンスの画家たちの絵画的世界に没入して自己を文化的に高め、神話の神々を装って親しい友人たちと酒を酌み交わし楽しい一時を過ごして不安を克服するのは、自己逃避ではない。自己の政治的思想や節を曲げて時流と妥協することなく、自分の意に反する世に存在しなくてはならない苦しみ耐えて生きるための積極的な処世の方法ではなかっただろうか。民衆の古来からの娯楽の対極は、宮廷の奢侈を極めた仮面劇であったが、そのどちらとも異なるカントリーハウスで培われてきた王党派の人々の上質の成熟した文化とそのメンタリティーの所産がこのようなしなやかな大人の生き方を産み出したのだと考えられる。

このような隠棲、特に田舎への隠棲のテーマは、1621年と1668年にホラチウスやヴェルギリウスの翻訳が出版されて以来人々の関心をひきつけていた。²²⁾そして、血生臭い内乱が始まると王党派の詩人達の詩のとりわけ切実なテーマになっていった。彼らの政治的な信条のために、議会派軍から活動を禁じられたり蟄居を命じられると、王党派の人々はかつてのようなカントリーハウスへの興味も失い、田園における生活にのめり込んでいった。彼らは臍を噛むような失意の閉塞状況にあって、ただ飲酒や恋愛や快楽に耽溺する軽薄な文学しか残さなかったと長い間信じられてきて、王党派の詩人達の叙情詩の評価は低かった。しかし、近年ホイッグ史観に修正の動きがあるためか、歴史学の分野の成果を巧みに

取り込んだためか、そのような固定観念による批評に対してゆっくりではあるが批判的な流れがでてきた。

社会からの隠棲には、狭い空間で十分であったようだ。あるいは、カントリーハウスの広間よりその方がむしろ適した場所であったかもしれない。日本の狭い空間の最右翼である茶室建築も戦国時代に心を同じくする人が心静かに対話を交わす場所として作られてきた事実も興味深いアナロジーであるかもしれない。17世紀半ばの英国の王党派の詩人達もまた、心を許す友と暖炉のそばで語り合いながら、他日を期すべく、厳しい時代にある自分たちを励まし合っていた。

ラブレイスの「こおろぎ」(“The Grasshopper: To My Noble Friend, Mr Chrls Cotton”)の第6スタンザで詩人とおぼしき語り手は、友情に満ちた、楽しい座談の雄であった友人に、寒くて凍り付いた時でもお互いの胸に「真の夏を」(“A genuine summer”)を作ろうと語りかけている。

Thou best of men and friends! we will create/ A genuine summer in each other's
breast/ And, spite of this cold time and frozen fate,/ Thaw us a warm seat to our
rest.// Our sacred hearths shall burn eternally/ As vestal flames; the North Wind, he/
Shall strike his frost—stretched wings, dissolve, and fly/ This Etna in epitome.

(ll. 21—28.)

これは、こおろぎが夏の間勤勉な蟻のように働きもしないで、歌ばかり歌って楽しく暮らし、冬が近づくと蓄えがないので凍えてしんでしまうというイソップの寓話をもとにしたギリシャのアナクレオンの詩を背景にした政治的アレゴリーの詩である。

蟻は清教徒達、そしてこおろぎは王党派の人々にたとえられているが、古代ギリシャ文学では王族と連想されており、それがチャールズⅠ世に言及しているのは明らかで、ラブレイスはこおろぎにギリシャ詩人よりは好意的である。引用の呼びかけられている人物は、友人のコットンである。こおろぎではない人間の自分たちは、たとえ政治的に厳しい冬の状況にあろうとも、心の中に本物の夏を作って、友情と寛大な精神でこの時代を生き残り、お互いの胸にヴェスタの女神の火を燃やしていれば、北風の翼もその火で溶けて、お互いの熱い胸は自由を再び得るであろうと、大人の決意を提案している。詩全体としては、自己を知り、その知に従って生きる自己制御の方が、蟻または清教徒の狭い真面目さや厳格さより優れていると言っているのだ。

ラブレイス自身は、武器を取って議会派軍と戦う戦場に赴き文武両道でアンガジェの人であったが、田園に潜み自らの心を鍛えるのも一つの戦いの方であった。挫折の心はこおろぎのような小動物や、自然に向かう。王党派の詩人達は、田舎の生活の中で屋内にこもるよりは、戸外へ出て庭や森の樹木の下で瞑想に耽るのを好んだ。心休まるのは家の中の部屋ではなく、木立の下を部屋に見立てる空間においてであった。田舎にこもり、自分自身に引きこもるためには、瞑想の空間はカントリーハウスの建物から外部に出て行かざるを得ないようだ。かつて、狩りにやってきたジェイムズⅠ世の訪問のため自分の屋敷に居ながら行く場所を失ったロース卿が、彼らより一足先に小川のそばの木立の下を最も安らかな眠りを楽しむ寝室にしていた。

ウエストモールランド伯、ミルドメイ・フェイン伯 (Mildmay Fane, Earl of Westmorland) はタイトルも「隠棲へ」("To Retiredness")において、戦争の喧噪から離れて、樹木の下
の部屋とも言うべき空間に座って、季節毎の木の営みの神秘を見つづ瞑想し、木から感謝
の念を学んでいたのである。神の被造物である自然を読み解くうちに、彼の思想は強くな
り、人工の作りものはすべて滅びるが自然は天国に通じるものであることを悟る。身動き
のとれない無為を強いられた状況に、自由という積極的な価値を見いだして、隠棲は彼の
「自由の偉大なるパトロンである」と言う。

フェインと対照的に小さな世界へ埋没する願望をもつのは、ジェイムズ・シャーリー
(James Shirley)である。彼は「庭園」("The Garden")の中で、人工的な当時の大きな
整形庭園を嫌って、小さな日当たりの良い土地にチューリップではなく、素朴なすみれや
百合の花を植えて、庭を造り、その中央に何本かの月桂樹と一もとのいちいの木でできた
ささやかな木陰のスペースで「夏の部屋」("summer room")をこしらえることで満足する。

I'the center of my ground compose/ Of bays and yew my summer room,/ Which may,
so oft as I repose,/ Present my arbor and my tomb. (ll. 25-28.)

古典古代から詩人の栄誉の冠を作る樹木とされる月桂樹は複数で表され、死の象徴であ
るいちいの木はたった一本あればこと足りるところをみると、詩人としてのアイデンティ
ティーの方が重要らしい。シャーリーは、王党派の人であれば抱いている悩みや不満を花
や自然現象に対象化して昇華を図っている。「私はすみれのうなだれた頭に自分が現れて
いるのを見るだろう」(ll. 17-18)。「その花の上に不満足な朝が憂鬱な涙を一滴流した」
(ll. 19-20)。

ついうなだれてしまい、不満足で鬱ぎがちではあるが、女性も存在しない、迷い込んで
くるナイチンゲール以外は聞くも恥ずかしい歌しか歌わない鳥も来ることのない静寂の
「夏の部屋」が、彼の頻りに通う休息所であるとなると、「夏の部屋」は、彼のあづまや
とも墓ともなるのだ。歌っても悲嘆に暮れて死んでしまうナイチンゲールを讀えて墓碑銘
を書く詩人は、実は自分のそれを書くことになる。禁欲的な詩人は、月桂樹のもとに座る
のであるが、自分自身の分身のような美しくさえずるナイチンゲールの死を悼む詩を一編
書くだけであるし、孤独だからといって歌の下手な鳥と寂しさを紛らわすことなく自らを
一人で保っている。月桂樹にいちいの木を配し、詩の世界と死とを対峙させた「夏の部屋」
で内省しつつ辛抱強く時を過ごしていた。

王党派の詩人が見つめた最小の小部屋は、多分、蝸牛の渦巻き型の殻である。「蝸牛」
("The Snail")の冒頭が示すように、ラブレイスはそれに当代の「政治的な世界のエンブ
レム」を見ていた。蝸牛は、どこへ小部屋を探す必要もなく、自分自身の殻の中へ自ら入っ
てしまう哲人なのである。引きこもる以外に身の処しどころのない人にとっては、蝸牛は
最小限の自己充足性をのシンボルである。内乱以後、王党派の人々の解決不能の問題は、
どこへ逃げたらよいのかであった。蝸牛は鉄砲に脅かされることは無いけれども、カリカ
チュア的にからかい気味の次のような言葉には不思議な真実の響きがする。

But frightened with a dog or gun,/ In thine own belly thou dost run,/ And thy house

was thine own womb,/ So thine womb concludes thy tomb. (ll. 34-36.)

自分の腹が非難所になり、家は自分の子宮であり、子宮はもともと自分の墓を閉じこめていて、生が死を内包する蝸牛の殻は、その暗闇で瞑想しながら眠る大理石の小部屋でもあるのだ。

時代は少し前に進みすぎるかもしれないが、蝸牛の殻まで家が極小化した反動は、まもなくやってきた。17世紀の終わり頃、英国の将来への方向性が定まってきたとき、名誉革命の時（1688年）から1730年頃までは、英国史上第二番目の大きなカントリーハウスの建設期が訪れる。立憲君主制がほぼ確立されると、地方の政治的権力の強化のために地方地主やジェントリに家を開放するには、カントリーハウスの規模の大きさが権力と地位の権威の象徴として必要であった。かつてはその豪華さを非難されたデヴォンシャー伯のチャッツワースやロバート・ウオルポール卿のホートン・ハウスなどは、もはやジョンソンの倫理に基づく価値観と関係なく、ただその大きさを純粋に賞賛されるという、内乱期に王党派の詩人が求めたものとは、全くベクトルを異にする新しい傾向が支配した。家もすぐれて政治的な記号なのである。

注

- 1) Malcolm Kelsall, *The Great Good Place: The Country House and English Literature* (Harvester Wheatsheaf, 1993), 5.
- 2) 本論は、第35回名古屋大学英文学会（1996年4月20日）における特別講演に加筆修正したものである。
- 3) "The Country House Poems of the Seventeenth Century," *JWCI* XIX (1956), 159-174.
- 4) *The Country House Poem: A Cabinet of Seventeenth Century Estate Poems and Related Items* (Edinburgh, 1994), 18.
- 5) Loc. cit..
- 6) *English Poetry of the Seventeenth Century* (Longman, 1985), 25.
- 7) *Penshurst: The Semiotics of Place and the Poetics of History* (Wisconsin, 1984), 25.
- 8) *Life in the English Country House* (Yale, 1978), 2.
- 9) 片木篤, 『イギリスのカントリーハウス』(丸善, 昭和63年), 14-15.
- 10) 篠崎実, 詩人と貴族——「ペンズハースト」における詩学と政治学——, 玉泉康男編, 『ベン・ジョンソン』(研究社, 1993年), 305.
- 11) *The Politics of Mirth: Jonson, Herrick, Milton, Marvell and the Defense of Old Holiday Pastimes* (Chicago, 1986), 9.
- 12) 山本和平他訳, 『都会と田舎』(晶文社, 1985), 47-50.
- 13) イーファー・トウアン著, 阿部一訳, 『個人空間の誕生: 食卓・家屋・劇場・世界』(せりか書房, 1993年), 85.
- 14) Philipa Tristram, *Living Space: in Fact and Fiction* (Routledge, 1983), 36.
- 15) *Ibid.*, 110
- 16) Mary Ann MacGuire, "The Cavalier Country-House Poem: Mutations on a Jonsonian Tradition," *SEL* 19 (1974): 93.
- 17) *Ibid.*, 88.

個人空間の起源

- 18) *Ibid.*, 270.
- 19) Lawrence Stone and Jeanne C. Fawtier Stone, *An Open Elite?: England 1540–1880* (Oxford, 1984), 320.
- 20) *Ibid.*, 180.
- 21) Stone, *Ibid.*, 301.
- 22) Maren-Sofie Røstvig, *The Happy Man*, Vol. I, (Norwegian Universities Press, 1962), 14.